

新年のご挨拶

理 事 長
学 長 小川 彰

明けましておめでとうございます。

皆様方にはご家族ともにご健勝で新年をお迎えになられましたこと心からお慶び申し上げます。

今年は本学にとりまして創立118年目にあたり、創立120周年まであと2年となり記念事業を推進している最中です。本学は私立岩手病院に医学講習所を併設した明治30年から始まっています。「歴史で見る・日本の医師のつくり方」と題した日本医学会の歴史展示によれば、明治30年には医師養成機関は全国で13施設でした。そのうち9校は官立で、東京帝国大学と旧制の第一高等学校から第五高等学校までと、3つの公立医学校です。私立の養成機関は全国4か所で、うち2つは東京にありました。一つは皆さんご存知の野口英世が学んだ済生学舎です。これは順天堂医院を教場として使っていましたがのちに廃校になりました。もう一つは高木兼寛が創設した慈恵医院医学校の前身、成医会講習所です。地方には本学と私立熊本医学校の2つのみでした。熊本医学校はのちに県立になり、県立から国立熊本大学になりました。従って、明治30年に存在した私立で地方にあった医師養成機関の中で現在まで残っているのは唯一本学のみです。現在は全国に80の医学部、医科大学があります。うち私立は29校、その中で明治30年から活動しているのは慈恵医大と本学だけです。北東北、岩手の医療の貧困を憂い貧しい中で借金をしながら開設した学祖三田俊次郎先生の先見の明があったからであり、すばらしい歴史であると思います。

一方、医師だけを養成しても良い医療は実現しないとして、同時に、産婆学校、看護婦養成所を併設しています。国が助産師、看護師を法で定める（国の助産師、看護師に関する法律は産婆規則：明治32年制定、看護婦規則：大正4年制定された）はるか前に養成機関を作っていた先見性にも驚かされます。チーム医療という言葉さえなかった時代から、既にチーム医療を実践していたこ

とになります。現在、学校法人岩手女子奨学会のご理解を得て岩手看護短期大学を本法人に移管する準備を進めています。そして、短期大学を基礎に4年制の看護学部を設置する予定であり、将来は4学部体制になる予定です。

そして、創立120周年記念事業として最も重要である矢巾新附属病院移転も順調に進んでおり、エネルギーセンターも昨年着工し、本年中に病院敷地の一部に県の療育センターが着工される予定です。新附属病院移転完成は平成31年を予定しています。

一方、資金面では大変な苦勞をしています。計画した時点から経済の状況が大きく変わりました。「5重苦」です。第一に「アベノミクス」、さらに「消費増税」、そして「円安」、「東京オリンピック」、「復興特別会計の終了」などであり、東京オリンピック準備のための施設建設や復興地の様々な事業が駆け込みで進められていることやその他により建築費用が大幅に高騰しています。しかし、本学の移転計画をここでストップするわけには参りません。予定通り進めなければなりません。そこで皆様にお願ひしたいのは、建築費用の増加に対処するため、全学一致一丸となって増益を図って頂く事です。附属病院関係では医療収入を上げていただきたいと思ひます。また、歯学部、薬学部では18歳未満人口が激減している中で、入学生の確保が大命題となっています。競争が激しく、ここ数年厳しい状況が続いておりますが、入学生確保を図って頂きたい。また、教育を更に強化し国家試験成績を向上させ、魅力ある大学作りに邁進して頂く事です。

全学の教職員が一致一丸となって、創立120周年記念事業を成功させるしかありません。皆様にはこのような状況をご理解頂き、平成27年は更なるご努力をお願いいたします。

平成27年が皆様と岩手医科大学にとってすばらしい年でありますよう、皆様のご健勝とご多幸を祈念申し上げます。頭のご挨拶といたします。

歴史に学び、未来を創る

創立120周年記念特別対談

脚本家・作家
内館 牧子

岩手医科大学 理事長
小川 彰



内館牧子さんと岩手医科大学との深い絆。そのはじまりは2008年のことです。盛岡文士劇に出演した内館さんはその打ち上げの席で突如倒れ、岩手医科大学附属病院に運ばれてきました。心臓と血管の急性疾患であり一刻を争う状態。すぐに緊急手術が行われ、一命を取り留めました。それから退院までの約3ヶ月、内館さんは岩手医科大学附属病院で過ごし、多くの病院スタッフと出会い、交流は今も続いています。

本号では、創立120周年を記念して昨年9月に行った内館さんと小川彰理事長の特別対談の内容をお届けします。

雪の降る夜に倒れた。 そして、そのまま岩手医科大学へ

内館 まさに九死に一生の経験でした。2008年、私は盛岡文士劇「宮本武蔵」に出演していたんですが、打ち上げの席で突然具合が悪くなってきたんです。冷たい風に当たればよくなるかなと思って廊下に出たんですが、そのまま倒れてしまいました。救急車で岩手医科大学附属病院に運ばれたんですが、運良く日本屈指の名医の岡林均教授が執刀してくださった。

小川 高名な作家さんが運ばれてきたと報告を受けていました。診断の内容を聞くと、相当な重症。命を落としてもおかしくなかったんです。

内館 はい。2ヶ月ICUにいるほどでしたからね。実際、東京に戻ってから、医療関係の友人たちに「岩手医科大学はすごいスタッフが揃っている。倒れた場所が岩手じゃなかったら死んでたかもよ」と言われましたね。

小川 循環器医療センターがクローズアップされますが、実は岩手医科大学には、日本初、世界初というものがあるんです。例えば昭和24年に、日本で角膜移植の第1号を手掛けたのは本学です。その後、昭和32年に角膜移植法が成立して、全国どこでも、アイバンクはあるし、角膜移植もできるようになった。そういう意味では、移植医療の先駆けと言えます。

それから、小児科の名誉教授・藤原哲郎先生が、当時、日本でも有数のNICU（新生児特定集中治療室）というものを作った。例えば800グラムで生まれた赤ちゃんを

入れて、温度や湿度を管理するわけなんですけど、なかなかうまくいかない。未熟児は肺胞が開かなくて、窒息してお亡くなりになっていく。その状況を見て藤原先生が人工サーファクタントという薬を世界で初めて作った。この薬を使うことで、世界中で約100万人の未熟児の命が救われたと言われているんです。

岩手医科大学に受け継がれてきた医療 新しく生まれる医療

内館 一方で東京の友人・知人たちは、先端医療は、東京の病院じゃないとダメなんじゃないかという考えがあるんですね。「内館は岩手で治療して大丈夫なのか」と心配していたそうです。病院も東京一極集中と思われがちですが、私自身、岩手医科大学附属病院に入院してみても、その考え方は違うなと思うようになりました。



小川 地方にありながら、世界一の医療を提供する。その思いが私たちの根底にあります。

今はキャンパスを新しくしておりますし、数年後には新病院ができます。医療においてはハードも大事な部分。どういう建物を作っていくかということも考えなければなりません。

矢巾のキャンパスは、医学部、歯学部、薬学部があるんですが、それぞれ独立した建物はないんです。つまり学部の垣根がないということ。例えば、各学部に似た基礎講座があり、学部ごとに独立してつくる必要はなく、統合基礎講座として一緒にしても良いでしょうと。文部科学省へは何度も足を運び、3年越しでやっと認めていただきました。



内館 いろいろな垣根を取り払って、知識を共有するっていうのは大きいことですよ。医療の現場でも新しいことが起きるんじゃないですか。

小川 医療というのは、本来、様々な人たちが関わり、チームで対応するのが理想。人と人が交わることで、連携は確実に深まっていくと期待しています。

内館 入院当初は点滴で2ヶ月は何も食べられなかったんです。離乳食みたいな食事になった時に、担当の先生に「これさえ食べられない。だから、点滴に戻してほしい」って言ったんです。そうしたらその先生が「一本の点滴よりも、一口のスプーンですよ」って言われたんです。目が覚めましたね。それからごはんを頑張ってお腹をいっぱい食べようと思ったら、みるみるよくなっていくんですね。

それともう一つ。リハビリで理学療法士の先生が、今日はこういう運動を20回やりましょうって言う。そして、次の日は25回。そうすると、朝来た看護師さんが「内館さん、すごい。昨日より5回多くできたんですね」って言っ

てくれるんです。病院内のスタッフで患者の状況がちゃんと共有されている。人間のあったかさや患者を治そうという意識をものすごく感じました。

小川 かつての岩手・北東北は、貧困に喘ぎ、患者さんが苦しんでいた。それを見て、創立者の三田俊次郎が私財をなげうって、明治30年に創ったのがこの学校です。その時に看護学校、産婆学校もいっしょにつくった。当時から、医者だけを養成してもダメだという考えがあったんでしょうね。今で言うチーム医療です。そして「医療人である前に、誠の人間であれ」という精神。病んでいる方々の気持ちをちゃんと認識して、奉仕していくということです。これは今も綿々と受け継がれる岩手医科大学の伝統と呼べるものです。

「東日本」にある大学として 取り組んでいくこと

内館 私は秋田生まれで、父は生まれも育ちも盛岡。やはり東北は特別な場所です。東日本大震災でも岩手医科大学は重要な役割を担っていると伺いました。

小川 東日本大震災発災後、通信機能も途絶えました。岩手県は沿岸南部から北部まで約200キロあるんです。被災地の状況がどうなっているかわからない。当時は5万人の被災者が500ヶ所の避難所に身を寄せていると言われていたんですが、まず状況を把握することに注力しました。それを行うことで、さらに混乱の状況が見えてきた。500人の避難者がいるところに、医療チームが1つ、その一方で50～100人の避難所に、3つの医療チームが入っていたりでバランスが悪い。私たちは岩手県の被災地に入る医療チームにライセンスを出したんです。このライセンスというのは、医療チームが食事やガソリンを現地調達ではなく、自分たちで用意してくること、雪が降っている時期だったので、ノーマルタイヤではなくスタッドレスタイヤを装着していることなどの条件を付けました。ただし、このライセンスを取得した医療チームは、薬がなくなったら、岩手医科大学で用意した薬をいくらでも持って行っていいというようにしました。また、例えば、とある医療チームが入っている避難所があったとして、週末には帰ってしまう。その場合には、別の医療チームにこの避難所へ入ってもらおうなど、スケジュールの調整も始めました。地元の医科大学がリーダーシップを取って進めていかないと、災害医療もうまくいかないということだと思います。



創立120周年、世界に羽ばたく大学へ

小川 明治30年から始まった歴史が120年を迎えます。岩手医科大学は地域医療に根ざし、地域の患者さんを治していきたいという思いから始まった。それは創立当初と変わらず、私たちが重視しているポイントです。岩手医科大学では「研究のための研究」というのは一切させないんです。あくまでも患者さん中心で考えています。実際の医療現場で活かせる研究を岩手医科大学が担うというつもりでいます。本学のやるべき道、世界に伍していく道は、生まれたシーズを患者さんの治療に活かすような、あるいは診断に活かせるような研究に特化していきたいと考えています。

内館 そういうところが岩手医科大学の個性になっていくと思うんです。患者の視点からすると、個性が際立っていないと、たくさんある病院の中から選ばないですよ。

内館牧子さんから岩手医科大学へのエール

内館 大相撲に、冬の時代がありました。本当に人が入らなくて、マス席でさえガラガラですよ。その時に放駒理事長、北の湖理事長が一貫して言っていたのが、「いい仕事を見せる」ということ。相撲本来とは関係のない人寄せのアイデアはやめよう。いい仕事の積み重ねは時間はかかるんですが、今は札止めが出るほど盛り返してきた。

そういう例を見ていると医療従事者にも、求められる「いい仕事」をしてほしいと思います。そして、それは必ず人の口の端にのぼるんですよ。この病院で助かっ

た。ここの医師が良かった。ここの看護師は細やかだった。そういう評判は全国に広がっていきます。今、小川理事長がお考えのことも多分共通していることと思います。それを若い学生たちに伝えていってほしいですね。

小川 その通りです。うちは病院だけでなく、人材育成の役割も担っています。将来を担う素晴らしい医療人を育てていきたいと思っています。

今までもドラマで医療現場を描いたものはありますが、本当はもっと地味で大変なことが多い。いつか内館さんに本当の医療の現場を描いて欲しいなと思います。今日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。



脚本家・作家 内館 牧子氏

秋田県生まれ東京育ち。武蔵野美術大学を卒業後、三菱重工業入社。

13年半のOL生活を経て、脚本家デビュー。主な作品に「都合のいい女」（フジテレビ）、「私の青空」。女性初の横綱審議委員を務めるなど、格闘技好きとしても知られる。

(本特集は、平成26年10月13日付岩手日報に掲載しています。)

120th
NEWS

創立120周年記念事業 特設サイトを開設しました

この度、創立120周年記念事業特設サイト (URL:<http://iwate-med-120th.jp/>) を開設しました。

2017年4月20日に迎える創立120周年までのカウントダウンを表示するほか、創立120周年に向けたビジョン、これまでの本学のあゆみ、ご支援いただいた方の御芳名などを掲載しています。

また、創立120周年記念事業の大きな事業の一つである附属病院移転事業の進捗状況や、各種イベント情報も随時発信する予定です。

創立120周年に向けて、当サイトを皆様と共に創り上げていきたいと思っておりますので、ご提案やご意見等がございましたら、創立120周年記念事業事務局 (内線: 7022、メール: anniv@j.iwate-med.ac.jp) までお寄せください。



シリーズ 職場めぐり

衛生学公衆衛生学講座

衛生学公衆衛生学講座は、矢巾キャンパス西研究棟3階にあります。現在は教授1名、准教授1名、講師1名、助教2名の6名で講義、実習を担当しています。

研究活動では、岩手県北地域コホート研究、透析コホート研究、RIAS Study、東北メディカルメガバンク事業などのコホート研究を中心に、循環器疾患と東日本大震災後の慢性疾患とメンタルヘルスのリスク要因の解明に取り組んでいます。また、全国規模の多施設共同研究では、NIPPONDATA研究班、JACC Study研究班、エビデンス班に加わり、がん、循環器疾患の要因解明に取り組んでいます。

大腿骨近位部骨折の罹患率調査は、5年に1度全国調査を実施し、その推移の把握に努めています。その他、産業保健分野における健康課題の解明、学校保健における肥満予防とインフルエンザ予防等広範囲な健

康課題について取り組んでいます。病気の原因の解明や予防に興味のある方は遠慮なくお立ち寄りください。

(教授 坂田 清美)



看護部 (耳鼻咽喉科・頭頸部外科外来)

耳鼻咽喉科・頭頸部外科外来は、午前が一般診療で、午後に完全予約制の専門外来を行っています。当外来の特徴として、高度難聴の人工内耳埋込み手術や頭頸部癌の患者が多く、入院に際しての患者情報や退院後の支援にあたり、病棟と外来の連携がとても重要です。このため、病棟との連携強化を目的に、毎週火曜日の医師・看護師合同の病棟カンファレンスに参加し情報共有を図り、継続看護につながるよう努力しています。加えてスタッフ一同、患者さんが少しでも安心して在宅で生活できるように、常に患者さんと御家族の声に耳を傾け、思いやりをもって接することを心がけています。

耳鼻科は、診察・処置が特殊であるため業務を円滑に進めることが重要で、医師と看護師のコンビネーションや外来全体のチーム力がとても大切です。この

ため、昼休憩の時間に医師やクラークを交え、誕生会や女子会等コミュニケーションの場を設けています。

(主任看護師 中塚 瑞江)



大学報原稿募集

岩手医科大学報は、教職員皆様のコミュニケーションの場として発行を重ねていますが、さらなる教職員同士の“活潑な意見交換の場”として原稿を募集しています。

岩手医科大学に対する意見や提言、日々の業務で感じること、サークル紹介、学報への感想など、様々な内容をお寄せください。(表紙写真も募集しています)

また、特集してほしいテーマや、各コーナー(「表彰の栄誉」「トピックス」「教職員レター」など)への掲載依頼などもお待ちしております。事務局までご連絡ください。

連絡先

大学報事務局(企画部企画調整課)
内線 7022
kikaku@j.iwate-med.ac.jp

クラブ活動報告会が行われました

12月1日(月)、矢巾キャンパス大堀記念講堂において、平成26年度クラブ活動報告会が行われ、小川学長・祖父江副学長をはじめ、各学部の学生部長、各クラブの部長及び学生が出席しました。



学友会役員の表彰

この報告会は、各クラブの活動状況や、本学学生が参加した東日本医科学生総合体育大会、全日本歯科学生総合体育大会、全日本薬学生総合体育大会などでの成績を報告する場として毎年行われているもので、総務局、体育局、文化局の各代表者から、今年度の活動報告と来年度の行事予定や抱負が述べられました。

続いて、12月で交代となった学友会役員や特に成績が優秀であった団体・個人に対しての表彰があり、前学友会総務局委員長 安田 圭太さんに小川学長より賞状が授与されました。

また、今年度は医大祭の開催された年度であり、赤坂学生部長より実行委員及び協力した文化部団体に感謝状が授与されました。

(写真提供：写真部)



医大祭実行委員の表彰

クリスマスコンサートが行われました

12月6日(土) 午後2時から本学附属病院外来1階待合ロビーにおいて、クリスマスコンサートが開かれ、入院患者さんやご家族など約100名が一早いクリスマス気分を味わいました。

このコンサートは本学学生オーケストラ部員と小児科病棟に入院中の盛岡青松支援学校の生徒さんによるもので、今年で13回目の開催となります。

コンサートは、学生扮するサンタクロースの指揮に合わせて「クリスマスフェスティバル」「Let It Go」などアンコール曲を含め計7曲が演奏されました。そのうち、「夢をあきらめないで」は盛岡青松支援学校の生徒さんと合同で演奏され、病気と闘いながらも、この日を目指して練習を重ねてきた成果が披露されました。また、学生オーケストラ部のメンバーが、生徒と患者さんの席を回ってキャンディーなどのささやかなクリスマスプレゼントを手渡し、心温まるコンサートとなりました。



高度看護研修センターケースレポート発表会が行われました



12月16日(火)、創立60周年記念館8階研修室において、高度看護研修センターのケースレポート発表会が行われました。

この発表会は、研修生が各々の実習施設において受け持った患者さんを通して実践した緩和ケアの成果について報告しました。

次いで、質疑応答と各緩和ケア病棟の実習指導者による総評が行われました。

研修生からは、「実習での学びを通して認定看護師を目指す気持ちを強くした」との決意が述べられました。

高大連携事業ウインターセッションが行われました

12月25日(木)・26日(金)の両日、矢巾キャンパス及び内丸キャンパスにおいて、いわて5大学(本学、岩手大学、岩手県立大学、盛岡大学、富士大学)と岩手県教育委員会が主催する高大連携ウインターセッションが開催されました。この催しは、高校生が大学に触れる機会を広く提供することで進路意識の高揚と学力の向上へつなげると同時に、高等学校と大学との連携を円滑化して魅力ある大学をつくることを目的として、平成15年から行われています。今年度は、県内の高校生94名が3学部の講義と実習を体験し、最終日には受講生一人ひとりに修了証書が手渡されました。体験後のアンケートでは、多数の高校生から高評価を得ており、「より深く興味を持った」「楽しく学ぶことが出来た」といった感想が寄せられました。



医学部プログラム
「動脈硬化・心臓病・脳卒中の学習を通じ日本の医療に触れる」



歯学部プログラム
「歯医者さんが歯を作るってどうやるの??」



薬学部プログラム
薬学部で学ぶこと 薬学の可能性、「くすり」の形と調剤

新年祝賀式が行われました

1月5日(月)、創立60周年記念館8階研修室において、平成27年の新年祝賀式が来賓・教職員約200名の出席のもと行われました。

祝賀式では、小川理事長から年頭のご挨拶があり(詳細は本号の巻頭に掲載)、その後は、ラウンジに場所を写し懇親会を行いました。懇親会では、祖父江副学長により乾杯の発声が行われ、出席した教職員全員が新年を祝い、一年の決意を新たにしました。



エフエム岩手 ラジオ番組「岩手医科大学 ~いのちから~」

2015年3月の放送予定(毎週日曜9:30~9:55)

放送日	テーマ	出演	
2月1日(日)	脂質異常症と高コレステロール対策	内科学講座糖尿病・代謝内科分野	武部 典子 講師
2月8日(日)	口腔ケア	歯科衛生部	赤松 順子 歯科衛生士長
2月15日(日)	食生活習慣の見直し	栄養部	二本木 壽美子 栄養士長
2月22日(日)	乳がん	外科学講座	柏葉 匡寛 講師

- 放送内容は都合により変更となる場合があります。
- 過去放送分は、エフエム岩手ホームページ(<http://blog.fmii.co.jp/inochikara/>)でお聴きいただけます。

岩手医科大学は 2017 年に創立 120 周年を迎えます



誠のあゆみ、
未来へつなぐ

創立 120 周年記念ロゴマーク・スローガン

編集後記

《岩手医科大学報編集委員》

小川 彰 菊池 初子
影山 雄太 江刺家和恵
松政 正俊 佐々木さき子
齋野 朝幸 米澤 裕司
小山 薫 佐々木忠司
藤本 康之 畠山 正充
佐藤 仁 大須賀志穂
成田 欣弥 武藤千恵子
山尾 寿子 野里三津子

今年は創立 118 年、小川理事長よりご紹介がありました創立当時から現在までのお話に本学が果たしてきた役割を改めてもしくは初めて認識された方もいらっしゃるかもしれません。本学の日本初、世界初の業績の実現には、医療チームとして大変な苦労があり、また現在は新しい成果に向けて地道な研究を積み重ねていることと思います。これまでのドラマでは描かれなかった『本当はもっと地味で大変なことが多い医療の現場』でこれからも自分の使命に邁進していきたいと思っています。

(編集委員 佐々木 さき子)

岩手医科大学報 第460号

発行年月日 平成27年1月31日

発行者 学長 小川 彰

編集 岩手医科大学報編集委員会

事務局 企画部 企画調整課

盛岡市内丸19-1

TEL. 019-651-5111 (内線7023)

FAX. 019-624-1231

E-mail: kikaku@j.iwate-med.ac.jp

印刷 河北印刷株式会社

盛岡市本町通2-8-7

TEL. 019-623-4256

E-mail: office@kahoku-ipm.jp